

C. 調査結果の分析

I. 調査票の分析

1. 回収率

配布対象1,174か所のうち、回収が得られたものは、653か所、55.6%の回収率であった。これら全てを分析の対象としたが、以下に述べる理由により、項目ごとに無効回答があり、それらは、当該項目の分析からは除いている。

2. 施設票回答者

施設票の冒頭で、回答者の職名を、1 保育所長、2 主任保育士、3 その他から選んでもらった。無回答の票が2票あり、これらは分析から除外した。図 I-1 に示すように、施設票の回答者は保育所長が76.2%（496名）、主任保育士が20.6%（134名）、その他が3.2%（21名）であった。その他の括弧内には、園長代理（1）、事務担当職員（1）、副園長（5）、副所長（1）、フリー（1）、保育士（1）などの回答があった。

3. 設置状況等

(1) 経営主体

経営主体を、1 市町村などの公営、2 社会福祉法人運営の民営、3 その他から選んでもらった。無回答の票が4票あり、これらは分析から除外した。図 I-2 に示すように、市町村などの公営が47.8%（310票）、社会福祉法人運営の民営が46.1%（299票）、その他が6.2%（40票）であった。その他の括弧内には、学校法人（5）、株式会社（5）、財団法人（6）、指定管理法人・医療法人・NPO法人、公設民営等（6）などの回答があった。

図 I-1 施設票回答者の職名

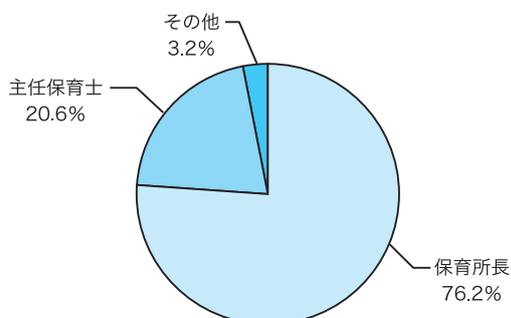
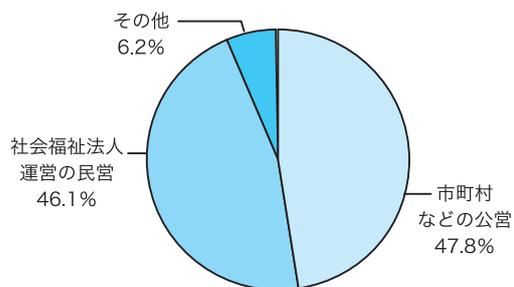


図 I-2 施設票回答者の職名

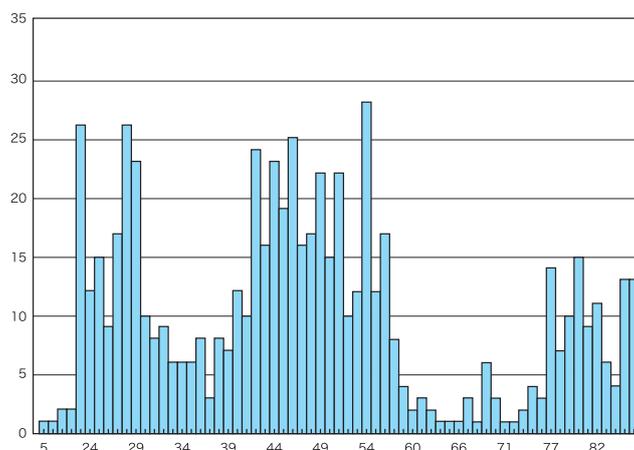


(2) 施設認可(届出)年

認可(届出)年の分布を示した者が図I-3である。平成の元号は、63を加えて昭和に続けた数値で示している。最も古いものは、昭和5年であった。本年と昨年の認可が、どちらも10か所以上あるなど、近年の変化がうかがえる。平均は昭和48年であった。

経営主体別に見ると、市町村などの公営の平均は昭和42.8年、社会福祉法人運営の民間は昭和52.6年、その他は昭和58.5年で、市町村などの公営が他の2つの経営主体よりも認可(届出)年が古かった。

図I-3 認可(届出)年

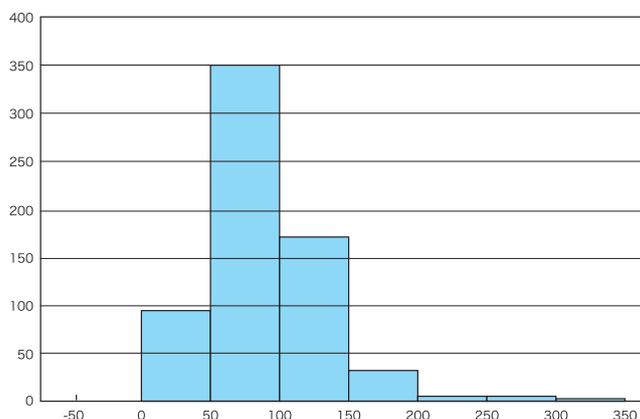


(3) 児童定員数

児童定員数の平均は92.2名であり、最小値は20名、最大値は350名であった。その分布を示したものが図I-4である。50名から100名規模の保育所が多いことがわかる。

経営主体別に見ると、市町村などの公営の平均は94.7名、社会福祉法人運営の民間は93.0名、その他は73.5名で、その他の定員数が、他の2つの経営主体より少なかった。

図I-4 児童定員



4. 平成23年9月1日現在の在園児数、職員数

(1) 在園児数

在園児数の合計値の平均は、92.1名と、児童定員数とほぼ同じであった。図 I - 5 は、各年齢の在園児数の平均を示したものである。0歳児クラス<1歳児クラス<2歳児クラス<3歳児クラス≒4歳児クラス≒5歳児クラスと、年齢による差が見られた。

図 I - 5 在園児数

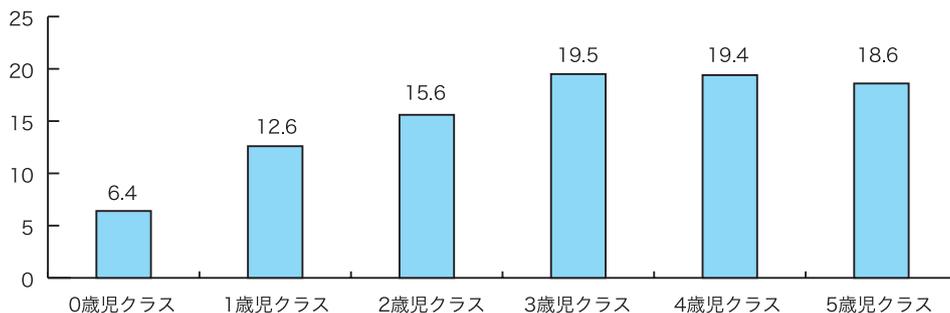


図 I - 6 経営主体別に見た在園児数

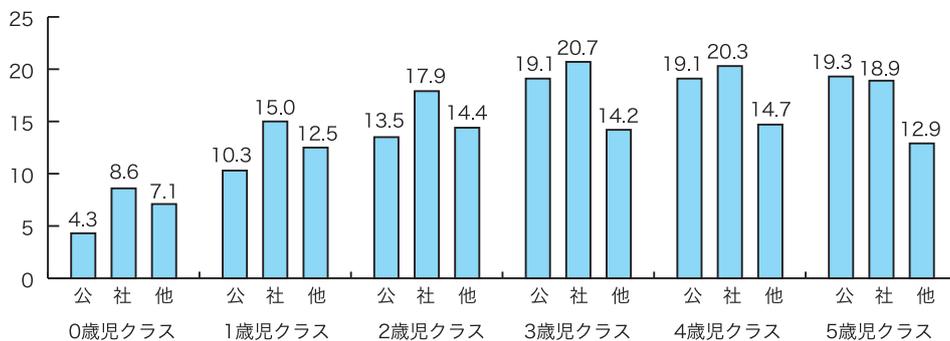


図 I - 6 は、経営主体別に見た在園児数の平均である。全体としてみると、社会福祉法人運営の民営（平均16.9名）が市町村などの公営（平均14.3名）とその他（平均12.6名）よりも在園児数が多かった。年齢別に見ると、0歳児では市町村などの公営（4.3名）よりも社会福祉法人運営の民営（8.6名）の方が平均在園児数が多かった。1歳児や2歳児でも同様に、市町村などの公営（順に10.3名と13.5名）よりも社会福祉法人運営の民営（順に15.0名と17.9名）の方が平均在園児数が多かった。3歳児と4歳児では、社会福祉法人運営の民営（順に20.7名と20.3名）の方がその他（順に14.2名と14.7名）よりも平均在園児数が多かった。5歳児では、市町村などの公営と社会福祉法人運営の民営（順に19.3名と18.9名）がその他（12.9名）よりも平均在園児数が多かった。

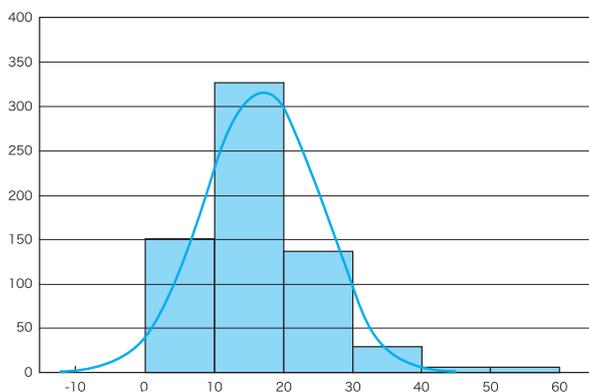
経営主体内の比較をしたところ、市町村などの公営では、0歳児<1歳児<2歳児<3歳児≒4歳児≒5歳児の順に、平均在園児数が多くなった。社会福祉法人運営の民営では、0歳児<1歳児<他の全ての年齢児という関係が見られた。また、2歳児は3歳児と4歳児よりも、5歳児は3歳児よりも、平均在園児数が少なかった。その他の経営主体では、0歳児だけが他の全ての年齢児よりも平均在園児数が少なかった。

(2) 職員数

職員数合計の平均は、23.1名であった。経営主体別に見ると、市町村などの公営が平均22.2名、社会福祉法人運営の民営が平均24.5名、その他の平均が20.6名であり、市町村などの公営の平均値が社会福祉法人運営の民営のそれよりも少なかった。

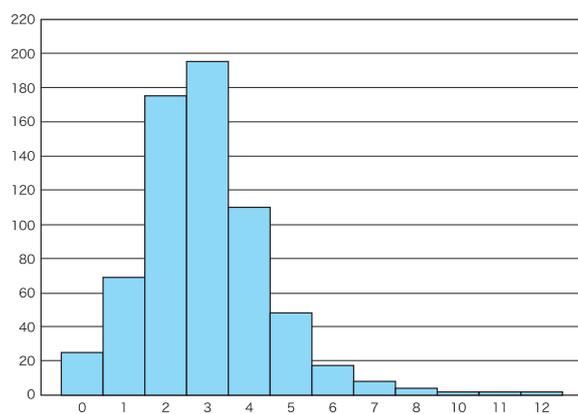
所長は1園を除き、全ての保育所で1名であった。除かれた園には所長がいなかった。保育士数の平均は16.7名、最大値は55名であった。その分布を示したものが図I-7である。保育士数で10名から20名の保育所が多いことがわかる。経営主体別に見たところ、市町村などの公営が平均16.1名、社会福祉法人運営の民営が平均17.9名、その他の平均が14.46名であり、社会福祉法人運営の民営が他の2つの経営主体よりも保育士数が多かった。

図I-7 保育士数の分布



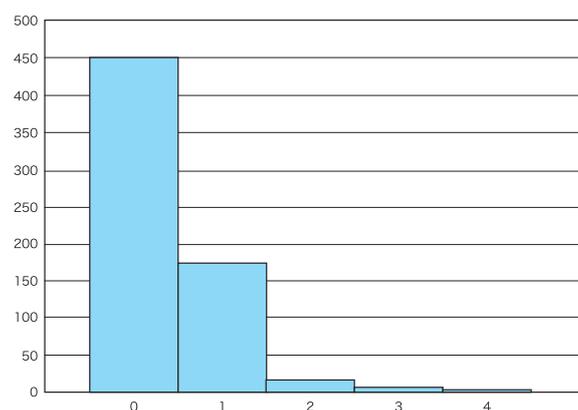
調理員数の平均は2.9名、最小値は0名、最大値は12名であった。その分布を示したものが図I-8である。調理員数で2名と3名の保育所が多いことがわかる。経営主体別に見たところ、平均値に差はなかった。

図 I-8 調理員数の分布



看護師数の平均は0.4名、最小値は0名、最大値は4名であった。その分布を示したものが図 I-9である。看護師数は0名が多いことがわかる。

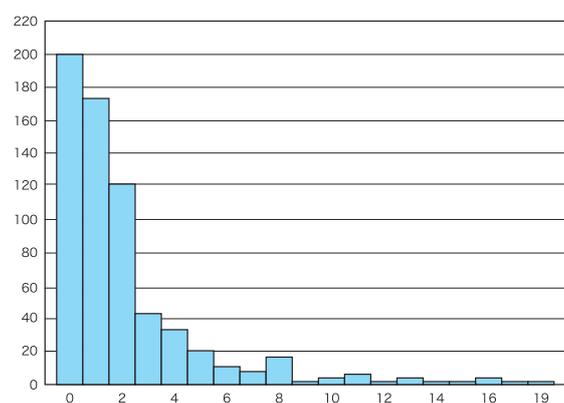
図 I-9 看護師数の分布



その他の職員数の平均は2.1名、最小値は0名、最大値は22名であった。その分布を示したものが図 I-10である。0名が多いことがわかる。

図 I-10 その他の職員数の分布

図 I-10 その他の職員数の分布



(3) 保育士の勤務形態別の人数

常勤正規職員、非正規職員（フルタイム）、非正規職員（パートタイム）の人数について記入を求めた。平均値、最小値、最大値を示したものが表 I-1 である。平均値を見ると、常勤正規職員＞非正規職員（フルタイム）＞非正規職員（パートタイム）の順に人数が多かった。最小値を見ると、常勤正規職員は1名であったが、非正規職員（フルタイム）と非正規職員（パートタイム）は0名であった。最大値を見ると、常勤正規職員が36名で最も多く、次いで非正規職員（パートタイム）が30名、非正規職員（フルタイム）が26名で最も少なかった。

次に経営主体による違いを調べた（表 I-2）。正規職員では、市町村などの公営の平均値が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体の平均値よりも低かった。非正規職員（フルタイム）では、市町村などの公営＞社会福祉法人運営の民営＞その他の経営主体の順に平均値が高かった。非正規職員（パートタイム）では、経営主体の差はなかった。

表 I-1 保育士の勤務形態別の人数

	平均値	最小値	最大値
常勤正規職員	9.8	1	36
非正規職員（フルタイム）	5.2	0	26
非正規職員（パートタイム）	4.4	0	30

表 I-2 経営主体別に見た保育士の勤務形態別人数の平均値

	市町村などの公営	社会福祉法人運営の民営	その他
正規職員	8.1	11.6	10.3
非正規職員（フルタイム）	5.9	4.8	2.9
非正規職員（パートタイム）	4.6	4.2	4.0

5. 保育の体制

(1) 平日の開所時刻と閉所時刻、および開所時間

この設問では、無回答が数多く見られた。具体的には、開所時刻の時欄が空欄になっている票（9票；以下、括弧内の数字は票数）、閉所時刻の時欄が空欄になっている票（9）、開所時間の時欄が空欄になっている票（14）、開所時刻の分欄が空白になっている票（10）、閉所時刻の分欄が空白になっている票（11）、開所時間の分欄が空白になっている票（44）があった。これら全てを分析から除外することも可能であったが、内容を検討したところ、次のよう

に解釈をすることで、いくつかの票を利用できることがわかった。(a) 時欄が記入されており、分欄が記入されていない票は、「0」分と解釈する。この解釈によって、開所時刻の分欄が空欄になっている票(1)、閉所時刻の分欄が空欄になっている票(2) および開所時間の分欄が空欄になっている票(30)を分析に利用できる。(b) 開所時間を開所時刻と閉所時刻から計算する。この計算で5票を分析に利用することが可能であった。しかしながら、以下の③に示す理由で、この5票を利用することはしなかった。(c) 閉所時刻から開所時刻を引いた値として定義していた開所時間を、実際に引き算をしてみたところ計算が合わない票があった(35)。その差を検討してみたところ、「24時間制でお書き下さい」と指定していたにもかかわらず12時間制で書かれていた票があった(6)。そこでこれらは24時間制に修正した。また閉所時間を1時としていた票があった。この票の開所時間を見たところ11時となっており、開所時間を見ると14時間となっていた。そこでこの票は25時と修正した。それでもまだ28票は計算間違いと思われた。しかしこれらはあえて修正はしなかった。これらを修正することは、データの改ざんに相当するからである。またこの理由で、(b)の最後に述べた5票については、修正しなかった。

なおこのような24時間制の修正を加えても、解釈が困難な票が2票あった。その1つは、開所時刻が7時15分、閉所時刻が8時0分、開所時間が12時間0分というものである。この票は、開所時刻の記入ミス、閉所時刻の記入ミス、開所時間の計算ミスという、3つの解釈が可能である。この票は、開所時刻と閉所時刻、および開所時間の全ての分析から除外した。もう1つは、開所時刻が7時30分、閉所時刻が6時0分となっており、開所時間が時間欄と分欄のいずれも無記入の票である。この票は、閉所時刻を18時に修正することもできるが、それをするには、開所時間を10時間30分と考えることになり、複数箇所の仮定に基づく修正をすることになる。そこでこの票も開所時刻と閉所時刻、および開所時間の全ての分析から除外することにした。

このような修正をふまえ、除外した票を数えた。最終的に分析に利用した票数は、開所時刻と閉所時刻の分析ではどちらも642票、開所時間の分析では638票であった。それぞれの平均値、最小値、最大値を示したものが表1-3である。先ず開所時刻に注目する。平均値は7時17分と7時前半であった。最頻値は7時0分であり、304票が7時0分であった。最小値は6時30分と最頻値よりも30分早かった。6時30分に開所の場合、もし子どもが6時30分に来るならば、その子どもは6時30分までに家を出ていることになる。とすると朝食は6時前後になると推測できる。最大値は12時0分であった。午後から開所する保育所であろう。

次に閉所時刻を見てみよう。平均値は18時52分と19時に近かった。最頻値は19時0分であり、318票が19時0分と、半数近い保育所が保育所がこの時間に閉所していた。最小値は16時0分であり、最頻値よりも3時間も早かった。最大値は25時であった。この保育所は11時0分に開

所していた。

開所時間を見ると、平均値は11時間35分であった。最頻値を調べると、12時間0分であり、291票が12時間0分と回答していた。最小値は6時間30分であった。児童福祉施設最低基準第34条に「保育所における保育時間は、一日につき八時間を原則とし、その地方における乳幼児の保護者の労働時間その他家庭の状況等を考慮して、保育所の長がこれを定める」とあるが、保育所長の判断で短くしたものと推測できる。最大値は15時間30分であり、上記の原則の2倍近い開所時間であった。当該票の詳細を調べると、開所時刻は6時30分、閉所時刻は21時0分であった。

表 I - 3 開所時刻、閉所時刻、開所時間の平均値、最小値、最大値

	平均値		最小値		最大値	
	時	分	時	分	時	分
開所時刻 (N=642)	7	17.0	6	30	12	0
閉所時刻 (N=642)	18	52.4	16	0	25	0
開所時間 (N=638)	11	35.4	6	30	15	30

次に経営主体による違いを調べた（表 I - 4）。分析された票数は、開所時刻と閉所時刻では、市町村などの公営、社会福祉法人運営の民営、その他の経営主体の順に、302票、297票、40票であった。開所時間では同じ順に300票、295票、40票であった。

開所時刻では、市町村などの公営の平均値が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体の平均値よりも遅かった。閉所時刻では、市町村などの公営の平均値が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体の平均値よりも早かった。開所時間では、市町村などの公営の平均値が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体の平均値よりも短かった。

表 I - 4 経営主体別に見た開所時刻、閉所時刻、開所時間の平均値

	市町村などの公営		社会福祉法人運営の民営		その他	
	時	分	時	分	時	分
開所時刻	7	24.2	7	10.2	7	13.6
閉所時刻	18	37.2	19	5.0	19	14.3
開所時間	11	11.6	11	55.9	12	4.4

(2) ローテーションの体制

「ローテーションの体制を組んでいますか」という設問に対して、無回答が16票あった。これらは本項の分析から除いた。「はい」という回答は596票、95.6%であり、「いいえ」という回答は41票、6.4%であった。この割合に経営主体による差はなかった。

先の項目に「はい」と回答した者に対して、「組んでいる場合、何交代制ですか」と、数字を書く欄を設けて尋ねた。その結果109票が無回答であった。交代数が曜日や週、月などによって異なり回答が困難だったのかもしれない。回答された交代制の分布を示したものが図 I-11 である。3交代制が最も多く、次いで5交代制であった。平均値を算出したところ、4.5となった (N=487)。

図 I-11 交代数の分布

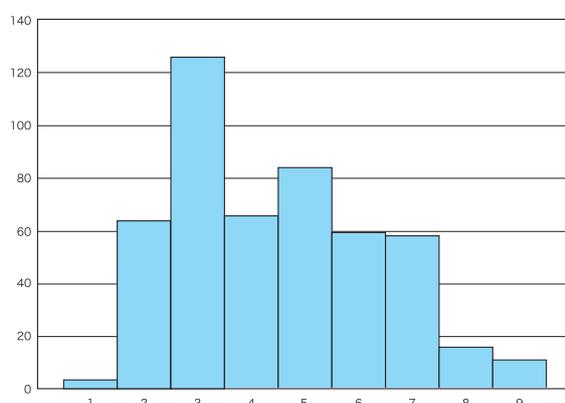
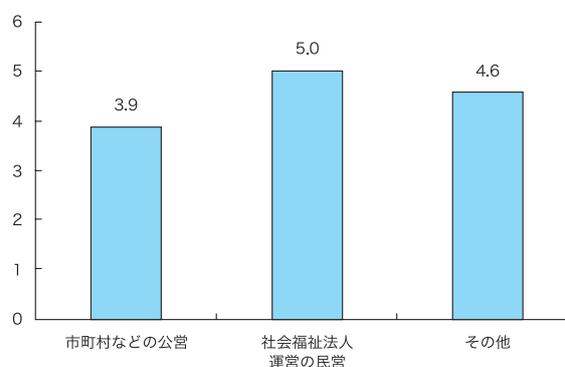


図 I-12 経営主体別に見た交代制の平均値



次に経営主体による差を調べた。分析の対象となったのは、市町村などの公営が225票、社会福祉法人運営の民営が230票、その他の経営主体が30票であった。平均値を示したものが図 I-12 である。市町村などの公営が社会福祉法人運営の民営よりも平均値が低かった。

(3) 最も早出出勤と最も遅出出勤

この設問は、上記のローテーションの体制を組んでいると答えた園、かつ交代制の欄に数字記入していると答えた園に回答を求めた。しかしながら、もしこのまま分析対象を限定すると、ローテーションの体制を取っているかどうかを尋ねた最初の設問に無回答の16票、あるいは「いいえ」と答えていた41票と、「はい」を選んだ中で交代制の欄の無記入の109票を除外するなど、かなり多くのデータ (約1/4) を除外することになり、調査対象園の概要を示すという施設票の分析としては不相当と考えられた。また最も早出勤務、最も遅出勤務だけなら、固定した勤務であっても、また交代制の欄が無記入であっても、調査対象園の概要を示すという目的であれば可能であると判断できた。そこで上記の(2)とは独立に分析をすることにした。

しかしながら、このような配慮の下でも、本節の（１）の分析にあるように、時刻の計算に関しては、部分的に無回答の票や24時間制で記入されていない回答の票が多く見られた。そこで（１）にならい、次のようにした。まず、最も早出勤務の職員の出勤時刻については、時欄が空欄の票は、分析から除外した（38）。分欄が空欄の票のうち、時欄に数字があるものは、0分とした（4）。次に、最も早出勤務の職員の退所時刻については、時欄が空欄の票は、分析から除外した（41）。時欄が3時の票は、出勤時刻が7時台であったので、15時とした（4）。時欄が4時の票は、出勤時刻が7時台あるいは8時台であったので、16時とした（21）。分欄が空欄の票のうち、時欄に数字があるものは、0分とした（4）。続いて、最も遅出勤務の職員の出勤時刻について、時欄が空欄の票は、分析から除外した（43）。分欄が空欄の票のうち、時欄に数字があるものは、0分とした（4）。さらに、最も遅出勤務の職員の出勤時刻について、時欄が空欄の票は、分析から除外した（46）。退所時刻の時が1時になっていた票は、閉所時刻から判断し、25時とした（1）。退所時刻の時が6時になっていた票は、閉所時刻から判断し、18時とした（9）。退所時刻の時が7時になっていた票は、閉所時刻から判断し、19時とした（5）。退所時刻の分が空欄になっていた票は0分とした（1）。

表I-5は、最も早出勤務と遅出勤務の職員の出勤時刻と退所時刻について、その平均値と最小値、最大値を示したものである。表中に分析対象となった票数も示した。最も早出勤務の出勤時刻の平均値は7時15分であり、最頻値は7時0分（N=257）であった。これらの値は、園の開所時刻の平均値や最頻値から想像できる値である。最小値は6時20分と、園の開所時刻の最小値である6時30分の10分前であった。最も早くから開所する保育所では、約10分で子どもを受け入れる準備をすると考えられる。最大値は11時0分であり、この園は開所時刻の最大値の園ではなかった。

表I-5 最も早出勤務と遅出勤務の職員の出勤時刻と退所時刻

		平均値		最小値		最大値	
		時	分	時	分	時	分
最も早出勤務	出勤時刻 (N=619)	7	15.2	6	20	11	0
	退所時刻 (N=616)	15	56.8	8	50	20	0
最も遅出勤務	出勤時刻 (N=614)	10	1.1	7	30	20	0
	退所時刻 (N=611)	18	50.9	16	0	25	0

最も早出勤務の退所時刻の平均値は15時57分で、16時に近かった。最頻値は16時0分であった（N=172）。最小値を見ると8時50分とかなり早い時間であった。この職員の出勤時刻を見ると、6時50分となっており、早朝に2時間だけ働く勤務であった。この保育所は、ローテーションの体制を組んでおり、9交代制であった。最大値は20時0分であり、この職員は11時に

出勤しており、当該保育所は、ローテーションの体制を組んでいないと回答していた。

最も遅出勤務の職員の出勤時刻の平均値は10時1分であり、10時を回っていた。最頻値は9時30分であったので（N=99）、右に裾野が長い分布であることがうかがえた。最小値は7時30分であった。当該保育所では3交代制のローテーションの体制を組んでおり、最も早出勤務の職員の出勤時刻は7時0分であり、7時から7時半の間に全ての職員が出勤していることが示された。なお最も遅出勤務の職員の退所時刻は18時30分と、11時間の勤務であった。最大値は20時0分であった。当該保育所は11時0分開所、25時0分閉所であり、ローテーションの体制は組んでいなかった。なお当該保育所の最も早出勤務の職員の出勤時刻は11時0分出勤、20時0分退所であり、最も遅出勤務の職員と入れ替わりの勤務であった。

最も遅出勤務の職員の退所時刻の平均値は18時51分、最頻値は19時0分（N=240）であった。最小値は16時0分であったが、当該保育所の閉所時刻を見ると18時0分となっており、全ての子どもが閉所時刻よりもかなり早い時間に帰ることが示唆された。最大値は25時0分であった。

次に経営主体による違いを調べた（表I-6）。分析された票数は、最も早出勤務の職員の出勤時刻では、市町村などの公営、社会福祉法人運営の民営、その他の経営主体の順に、288票、291票、37票であった。同職員の退所時刻では同じ順に、286票、290票、37票であった。最も早出勤務の職員の出勤時刻では、同じ順に、283票、291票、37票であった。同職員の退所時刻では、同じ順に、281票、290票、37票であった。

最も早出勤務の出勤時刻と最も遅出勤務の退所時刻で差が見られた。最も早出勤務の出勤時刻では、市町村などの公営が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体よりも平均値が遅かった。最も遅出勤務の退所時刻では、市町村などの公営が、社会福祉法人運営の民営とその他の経営主体よりも平均値が早かった。

表 I - 6 経営主体別に見た最も早出勤務と遅出勤務の職員の出勤時刻と退所時刻の平均値

		市町村などの公営		社会福祉法人運営の民営		その他	
		時	分	時	分	時	分
最も早出勤務	出勤時刻	7	23.8	7	7.0	7	11.6
	退所時刻	15	57.6	15	53.3	16	15.9
最も遅出勤務	出勤時刻	10	1.5	9	58.9	10	4.5
	退所時刻	18	37.3	19	2.2	19	6.1

（4）園内研修

「園内研修について、次の形態（内容）の研修を年に何回行っていますか」として、①園外講師を招いての研修、②読書会、③事例検討会、④公開保育（園内公開保育を含む）、⑤その

他について尋ねた。⑤その他には、「内容を具体的に記入して下さい」として、箇条書きで2つの研修の内容を書いてもらえる欄を作った。

無回答の票数を調べたところ、①園外講師を招いての研修では151票、②読書会では302票、③事例検討会では143票、④公開保育（園内公開保育を含む）では205票、⑤その他では294項目が無回答であった。これらを全て除いて分析すると、実際にその研修をしているところだけを集計してしまうことになり、かなり高い値が算出される。また無回答を全て「0」にすると、この設問全体に無回答の票も0回として計算してしまうことになり、かなり低い値が算出される。そのためこれら2つの方法は、どちらも不適當であると考えられる。

そこで、本報告書では次のようにすることにした。(a) 5項目の全てが空欄の票(25)は問11の分析から除外する。(b) ①から④の項目のうち、いずれかの項目の欄に「1」以上の数字があり、「0」がない場合、①から④の空欄はすべて0とする。(c) ①から④の項目のうち、いずれかの項目の欄に「0」の数字がある場合、空欄は空欄のままとする。(d) ⑤その他の項目は、先ず「記入あり」と「記入無し」に区別し、「記入あり」の場合の平均値や分布を検討する。(e) 全研修回数として、5項目の研修回数を合計した値も分析する。ただしこの分析でも(a)で除外した25票は分析対象とはしない。

表I-7は、①から⑤の研修とその合計値について、分析票数、平均値、最小値、最大値を示したものである。上記のようにしたこと、⑤その他を除き、600以上の分析票数が確保できた。

表I-7 各研修形態（内容）の年間回数の平均値、最小値、最大値

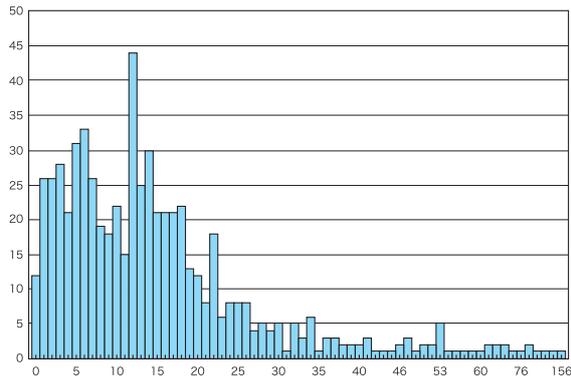
	分析票数	平均値	最小値	最大値
①園外講師を招いての研修	625	2.2	0	85
②読書会	617	1.2	0	48
③事例検討会	605	7.4	0	60
④公開保育（園内公開を含む）	617	2.2	0	42
⑤その他	198	9.7	0	60
①～⑤の合計値	628	15.7	0	156

先ず①～⑤の合計値を注目した。平均値は15.7回となっており、月に1回以上の研修が行われていることになる。分布を示したものが図I-13である。最頻値は12回、すなわち毎月1回の研修で、44票がこの値であった。最小値は0であった。今回の調査では研修の定義が曖昧なので、全く研修を実施していない園があるとは言い切れないが、今後の研究課題とできる。最大値は156回と、週3回の研修を実施している保育所があった。

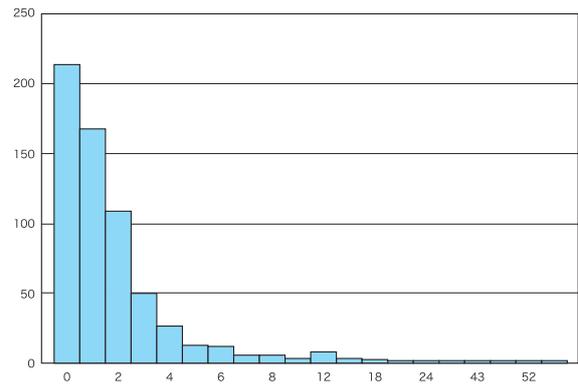
次に①から⑤のそれぞれについて順に検討する。①園外講師を招いての研修は、平均が2.2

回と半年に1回程度であった。分布を示したものが図I-14である。最頻値を見ると0回（212票）と、約3分の1の保育所はこれを全くしていなかった。最大値は85回と週に1回以上、この研修を行っていた。園外講師を招くには、保育士養成施設を活用する手もあるが、時間や謝礼等、検討すべき点が多々ある。この研修を中心に考えるのであれば、頻繁に行っている保育所に、そのやり方を尋ねることが必要である。

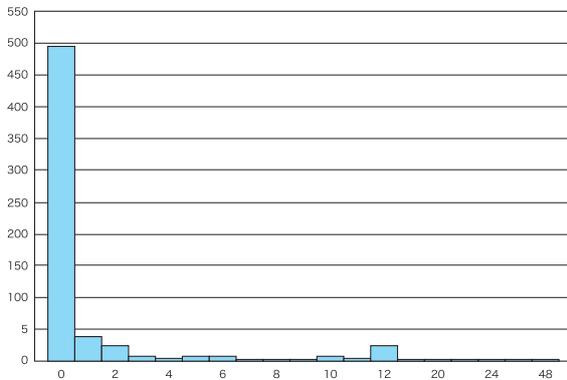
図I-13 合計値の分布



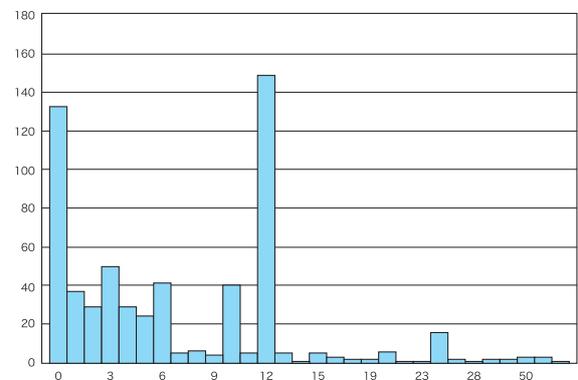
図I-14 園外講師を招いての研修の回数の分布



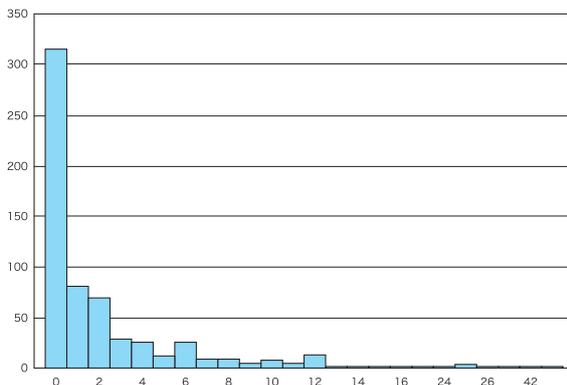
図I-15 読書会の回数の分布



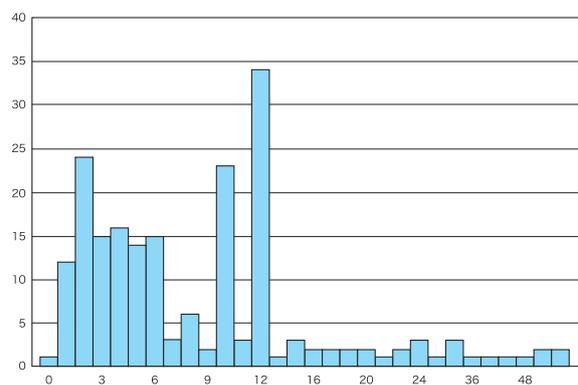
図I-16 事例検討会の回数の分布



図I-17 公開保育の回数の分布



図I-18 その他の研修の回数の分布



いずれも横軸が回数、縦軸は票数（頻度）

②読書会について、平均値は1.2回であった。図 I-15 に示した分布を見ると、ほとんどの保育所で行われていないことがわかる。ただし最大値にあるように、年48回と、毎月4回行っているところも見られた。

③事例検討会の平均値は7.4回と、2ヶ月に1回以上のペースである。しかし図 I-16 に示した分布からは、毎月実施しているところと、全く実施していないところの2極化していることがわかる。最大値を見ると、60回と、毎週実施している保育所もあった。

④公開保育について、平均値は2.2回であったが、図 I-17 に示した分布からは、0回の保育所も多いことがわかる。

⑤その他の研修については、平均値が9.7回と比較的多かった。図 I-18 に示した分布を見ると、12回と毎月1回行っている保育所と、3回と学期に1回行っている保育所が多いことがわかる。最大値は60回と、毎週実施している保育所もあった。

次に、経営主体による違いを分析した。図 I-13 から I-18 に見たように、分布は正規分布とは言いがたかったので、各研修の実施回数の中央値を算出し、その値より多い実施回数を報告した票の割合(%)を比較した(表 I-8)。①園外講師を招いての研修でのみ、若干の差が見られ、市町村などの公営よりも社会福祉法人運営の民営の方が中央値よりも実施回数が多い票の割合が大きかった。

表 I-8 経営主体別に見た中央値よりも研修回数が多かった割合(%)

	中央値	市町村などの公営	社会福祉法人運営の民営	その他
①園外講師を招いての研修	1	35.5	44.1	33.3
②読書会	0	20.2	20.2	11.4
③事例検討会	6	44.4	43.3	38.2
④公開保育(園内公開を含む)	0	48.3	49.8	45.7
⑤その他	7	41.9	57.8	50.0
①～⑤の合計値	12	45.6	53.5	37.8

(5) 第三者評価受審の経験

第三者評価受審の経験を「あり」「なし」として尋ねたところ、27票は無回答であった。これらを除いて分析したところ、「あり」は全体で19.6%(123票)であった。

経営主体による差を調べたところ、「あり」の割合は、市町村などの公営で15.4%、社会福祉法人運営の民営で23.7%、その他の経営主体で20.0%と、社会福祉法人運営の民営が市町村などの公営よりも、割合が高かった。

II. 個票の分析

1. 分析対象

先述のように、回収が得られた施設票は、653か所、55.6%の回収率であった。しかしながら、個票の分析については、これらの全ての回収された施設のすべての票を利用することは、以下の3つの理由でできなかった。第1の理由は、該当者がいない施設があったからである。個票では、各施設において、B-①票は保育所の通算経験年数3年以下、B-②票は保育所の通算経験年数4年以上10年未満、B-③票は保育所の通算経験年数10年以上の保育士に回答を依頼した。しかしながら、全ての保育所に経験年数3年未満、あるいは経験年数10年以上の保育士が在職しているとは限らない。そこで、各個票には、冒頭に「該当者なし」の欄を設けて、当該施設に該当者がいない場合には、この欄に○をしてもらうことにした。表II-1の第2列に「該当者なし」に○があった票数を示した。これらの票は全ての分析から除外した。

第2の理由は、各個票で尋ねた経験年数と、それぞれの表で求めた経験年数との間に矛盾した票があったからである（表II-1の第3列参照）。例えば、B-③票は経験年数10年以上の保育士に回答を求めたものである。しかしながら設問4で保育所保育士の経験年数の通算を尋ねたところ、10年未満の票が数多く見られた。これについてはいくつかの解釈が可能である。具体的には、a. 保育所の経験年数は10年以上と長い、保育所保育士としては短いケース、b. B-①票を保育所の経験年数10年以上に誤って渡してしまったケース、c. 職員が3名の保育所で、その3名の通算経験年数が3年以下で一人、4年以上10年未満で二人の場合で、一人の保育士にだけ回答させないことが公平性を欠くと考えられたケースなどである。回収された調査票からこれらを判別することは困難であった。そこで忸怩たるものはあったが、これらの票は分析から除いた。なお、B-①票に関して、「3年以下」は、4年未満と解釈した。

第3の理由は、設問や項目によって無回答の票や明らかに誤った数値の票があったことである。例えば、設問7では、登園（出勤した）時刻（①）、降園（退所した）時刻（②）、園にいた時間（②-①）の記入を求め、さらに園にいた時間を、保育の時間、保育記録を作成するのにかけた時間などに分けて記入してもらった。この設問では、園にいた時間が無回答であったり、計算が誤っていたり、園にいた時間と業務等の合計時間が合わない票があった。これらについては、少し煩雑になるが、項目ごとに分析から省いた票を示すことにした。

表II-1 分析から除いた票数と分析に用いた票数

	「該当なし」の票数	保育所保育士の経験年数の通産と矛盾があった票数	分析に用いた票数
B-①（保育所の通算勤務年数3年以下）	116	71	466
B-②（保育所の通算勤務年数4年以上10年未満）	84	77	492
B-③（保育所の通算勤務年数10年以上）	23	40	590

2. 個票回答者

(1) 担当するクラス

0歳児クラスから5歳児までと混合クラスと、7つの選択肢を設けて担当するクラスを選んでもらった。B-①（保育所の通算勤務年数3年以下）〔以下、「3年以下」と記載。以下同じ〕では13票、B-②（保育所の通算勤務年数4年以上10年未満）〔「4～10年」〕では20票、B-③（保育所の通算勤務年数10年以上）〔「10年以上」〕では42票が無回答であった。各担当クラスの割合を示したものが表Ⅱ-2である。3年以下は他と比べて、0歳児クラスと5歳児クラスが少なく、1歳児クラスと2歳児クラスが多かった。4～10年は他と比べて、1歳児クラスが少なく5歳児クラスが多かった。10年以上は他と比べて、0歳児クラスが多く、2歳児クラスが少なかった。

表Ⅱ-2 経験年数別に見た担当するクラスの割合（％）

	0歳児クラス	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス	混合クラス	回答人数
3年以下	8.6	18.3	25.8	14.1	9.9	5.3	17.9	453
4～10年	11.2	10.8	17.2	16.1	12.9	14.8	16.9	472
10年以上	16.1	14.2	12.8	13.7	10.8	11.5	21.0	548
平均(重みなし)	12.0	14.5	18.6	14.6	11.2	10.5	18.6	1473

(2) クラスでの役割分担

3年以下では17名、4～10年では25名、10年以上では34名が無回答であった。表Ⅱ-3に各選択肢が選ばれた割合を示す。3年以下は他と比べてリーダーが少なく、サブリーダーとその他が多かった。4～10年は他と比べてリーダーが多く、その他が少なかった。10年以上は他と比べてリーダーが多く、サブリーダーとその他が少なかった。

表Ⅱ-3 経験年数別に見たクラスでの役割分担（％）

	リーダー	サブリーダー	その他	回答人数
3年以下	41.9	29.4	28.7	449
4～10年	69.6	15.0	15.4	467
10年以上	79.9	6.7	13.5	556
平均(重みなし)	63.8	17.0	19.2	1472

(3) 雇用形態

3年以下では2名、4～10年では2名、10年以上では1名が無回答であった。表Ⅱ-4に各選択肢が選ばれた割合を示す。3年以下は他と比べて正規職員が少なく、非正規職員（フルタイム）が多かった。逆に10年以上は他と比べて正規職員が多く、非正規職員（フルタイム）が少なかった。

表Ⅱ-4 経験年数別に見た雇用形態（％）

	正規職員	非正規職員 (フルタイム)	回答人数
3年以下	68.5	31.5	464
4～10年	79.8	20.2	490
10年以上	94.4	5.6	589
平均（重みなし）	80.9	19.1	1543

(4) 性別

3年以下で1名、4～10年で1名が無回答であった。表Ⅱ-5に男性と女性選ばれた割合を示す。3年以下は他と比べて男性が多く、女性が少なかった。逆に10年以上は他と比べて女性が多く、男性が少なかった。

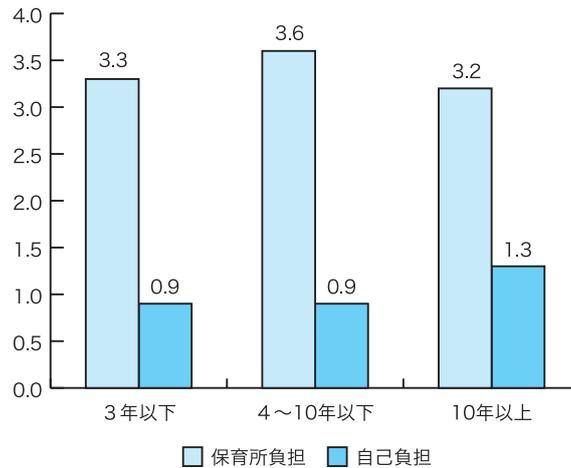
表Ⅱ-5 経験年数別に見た性別割合（％）

	男性	女性	回答人数
3年以下	5.2	94.8	465
4～10年	4.3	95.7	491
10年以上	1.7	98.3	590
平均（重みなし）	3.7	96.3	1546

(5) 研修回数

保育所負担と自己負担の研修回数の平均値を示したものが図Ⅱ-1である。回答人数は、保育所負担が3年以下、4～10年、10年以上の順に、404名、438名、532名であり、自己負担が279名、319名、364名であった。図から明らかのように、保育所負担が自己負担よりも多かった。

図II-1 経験年数別にみた平均研修回数



3. 勤務実態

設問7では、調査票を記入日の前日（平日）の勤務実態を調べた。この設問では3セットの回答欄を設けた。その1つは、登園（出勤した）時間（①）、降園（退所した）時間（②）、および園にいた時間（②－①）というセットである。園にいた時間は、降園時間から登園時間を引く形で算出するようになっていた。2つめはさまざまな業務に携わった時間というセットである。8つの業務を取り上げ、それらに携わった時間とそれらの合計時間を尋ね、合計時間は最初のセットの園にいた時間と同じになるように記入を求めた。最後は、帰宅後、あるいは出勤前に行った仕事の有無とそれにかけた時間というセットである。仕事がある場合、その内容と所要時間、および合計時間を尋ねた。冒頭の分析対象で述べたように、特にこの設問7では無回答が多かった。そこで、これらのセットごとに分析対象の票数を変えることにし、できるだけ多くの正確に記入された票を分析した。

（1）登園時間、降園時間、園にいた時間

これらの調査項目では登園時間と降園時間は24時間制で記入を求めた。しかしながら、園にいた時間と登園時間の差から判断して、24時間制になっていない票（後述するように、全てを「分」に直して計算すると、ちょうど720分の差）が、3年未満で23票、4～10年で25票、10年以上で43票あった。そこでこれらは24時間制に修正して計算した。

次に、全ての時間を午前0時0分からの「分」に換算し、降園時間の値から登園時間の値を引いた差と、園のいた時間の値と比較した。差と園にいた時間の値が異なっていたのは、3年未満で62票、4～10年で65票、10年以上で76票であった。そこでこれらは分析から除いた。分析に用いた票数は、3年未満が404票、4～10年が427票、10年以上が514票であった。

表II-6は、経験年数別に、登園時間、降園時間、園にいた時間の平均値を示したものであ

る。いずれも顕著な差はなかった。すなわちいずれの経験年数であっても、登園時間は8時15分頃、降園時間は17時55分頃、園にいた時間は9時間40分程度であった。

表Ⅱ－6 経験年数別に見た登園時間、降園時間、園にいた時間の平均値

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
(2)登園(出勤した)時間 ①	8	15.0	8	14.1	8	13.8
(3)登園(退所した)時間 ②	17	59.0	17	51.3	17	56.1
(4)園にいた時間 (②－①)	9	44.0	9	37.2	9	42.2

(2) さまざまな業務に携わった時間

この項目では表Ⅱ－7－1に示す8つの業務に携わった時間とその合計時間の記入求めた。その際、合計時間は、先に求めた園にいた時間と同じになるように記載することを求めた。そこで合計時間と園にいた時間が合致しない票は、全て分析から削除した。これをしないと、各業務に携わった時間を過小評価、あるいは過大評価してしまうと考えたからである。分析に用いた票数は、3年未満が333票、4～10年が355票、10年以上が401票であった。

表Ⅱ－7－1 経験年数別に見た業務に携わった時間の平均値

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
④保育の時間(子どもや保護者とかがわっていた時間)	7	5.8	7	7.5	6	53.4
⑤保育記録を作成するためにかけた時間	0	26.4	0	22.6	0	21.9
⑥保育教材を作成するのにかけた時間 (指導計画の作成、教材研究を含む)	0	26.7	0	22.8	0	23.2
⑦事務的な仕事にかけた時間	0	20.2	0	21.7	0	33.4
⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間	0	22.7	0	22.8	0	23.0
⑨会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間	0	19.9	0	20.1	0	25.0
⑩休憩時間	0	30.8	0	29.9	0	31.1
⑪その他の内容にかけた時間	0	12.7	0	11.9	0	11.1
合計(「園にいた時間」と同じ)	9	45.2	9	39.2	9	42.3

表Ⅱ－7－1を見ると、④保育の時間は約7時間、⑤保育記録を作成するのにかけた時間、⑥保育教材を作成するのにかけた時間、⑦事務的な仕事にかけた時間、⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間、⑨会議・打合せ・報告等にかけた時間、⑩休憩時間が、それぞれ約20～30分であった。子どもや保護者とかがわる時間が保育士の業務の中心であると、保育士が捉えてい

ることがわかる。また保育記録や保育教材など、保育実践に欠かせない内容に25分程度しかかけられていないことがうかがえる。

経験年数による違いを見ると、④保育の時間、⑤保育記録を作成するのにかけた時間、⑦事務的な仕事にかけた時間で差が顕著であった。④保育の時間では、4～10年の保育士が10年以上の保育士よりも、保育にかけた時間が長かった。⑤保育記録を作成するのにかけた時間では、3年以下の保育士が10年以上の保育士よりも、保育記録を作成するのにかけた時間が長かった。⑦事務的な仕事にかけた時間では、10年以上の保育士が3年以下と4～10年の保育士よりも、事務的な仕事にかけた時間が長かった。また、⑨会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間でも10年以上の保育士が3年以下と4～10年の保育士よりも、事務的な仕事にかけた時間が長い傾向が見られた。

表Ⅱ-7-2は、8つの業務に携わった時間の最小値と最大値を経験年数別に示したものである。先ず最小値を見ていこう。④保育の時間の最小値は、3年以下で3時間49分とほぼ4時間であった。これに対して、4～10年では2時間ちょうど、10年以上では0分であった。経験年数が増えるにつれて、子どもや保護者にかかわらない保育者が現れるようになる可言えよう。⑤保育記録を作成するのにかけた時間、⑥保育教材を作成するのにかけた時間、⑦事務的な仕事にかけた時間、⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間、⑨会議・打合せ・報告等にかけた時間、⑩休憩時間、⑪その他の内容にかけた時間の最小値は0分であった。すなわち、これらにまったく時間をかけなかった保育者が、いずれの経験年数にもいたことになる。

次に最大値に目を向ける。④保育の時間の最大値は、3年以下で10時間20分、4～10年で9時間50分、10年以上で10時間5分と、ほぼ10時間であった。標準勤務時間を1日8時間と考えると、それよりも2時間も多く、しかも子どもや保護者とかわるだけに、その時間を使っている保育者がいた。

⑤保育記録を作成するのにかけた時間の最大値は、3年以下で3時間15分、4～10年で2時間15分、10年以上では3時間50分であった。保育を振り返った証拠となるのが、この記録である。経験を重ねると、書く力がつく。そのため短時間で記録が書けるようになる可能性はある。10年以上になるとさまざまな振り返りが必要になるのかもしれない。

⑥保育教材を作成するのにかけた時間は3時間から4時間であった。教材作成にはそのくらいの時間が必要なかもしれない。

⑦事務的な仕事にかけた時間は経験年数が増えるにつれて、増加していた。特に10年以上では7時間もこれに従事していた保育者がいた。

⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間は2時間～3時間、⑨会議・打合せ・報告等にかけた時間は3～4時間程度、⑩休憩時間は1時間半程度、⑪その他の内容にかけた時間は2時間半

から約5時間が最大値であった。

最大値と最小値を並べてみると、保育士の業務には個人差が大きいことがわかる。完全なる分業化が進んでいる可能性もある。

表Ⅱ－7－2 経験年数別に見た業務に携わった時間の最小値と最大値

	最小値						最大値					
	3年以下		4～10年		10年以上		3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分
④保育の時間（子どもや保護者とかがわっていた時間）	3	49	2	0	0	0	10	20	9	50	10	5
⑤保育記録を作成するためにかけた時間	0	0	0	0	0	0	3	15	2	15	3	50
⑥保育教材を作成するのにかけた時間 （指導計画の作成、教材研究を含む）	0	0	0	0	0	0	3	25	3	0	4	0
⑦事務的な仕事にかけた時間	0	0	0	0	0	0	3	10	5	30	7	0
⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間	0	0	0	0	0	0	2	20	3	0	2	30
⑨会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間	0	0	0	0	0	0	4	20	3	15	4	10
⑩休憩時間	0	0	0	0	0	0	1	30	1	35	1	30
⑪その他の内容にかけた時間	0	0	0	0	0	0	4	55	2	30	3	0

（3）帰宅後、あるいは出勤前に行った仕事

「いわゆる「持ち帰り」をするなど、帰宅後、あるいは出勤前に、保育に関する仕事をされましたか。された場合、その仕事の内容と所要時間を記入してください」とした。仕事をしたかどうかは「あり」か「なし」かの二選択とした。3年以下では14票、4～10年では19票、10年以上では36票が無回答であった。表Ⅱ－8は、「あり」と「なし」の割合（％）を示したものである。10年以上では「あり」が「なし」よりも多かった。

表Ⅱ－8 いわゆる「持ち帰り」の有無（％）

	あり	なし	回答人数
3年以下	48.7	51.3	452
4～10年	49.5	50.5	473
10年以上	56.1	43.9	554
平均（重みなし）	51.4	48.6	1479

次に実際にどの程度の時間、それらの仕事、すなわち「持ち帰り」にかけたのかを分析した。分析対象は、合計時間とした。回答したのは、3年以下では191票、4～10年では208票、10年以上では274票であった。表Ⅱ－9は、合計時間の平均を示したものである。経験年数にかか

わらず、約1時間25分であった。

表Ⅱ－9 「持ち帰り」仕事の平均時間

	時間	分	回答人数
3年以下	1	29.0	191
4～10年	1	21.4	208
10年以上	1	26.5	274
平均（重みなし）	1	25.6	673

（4）有給休暇の使用率

昨年度の年次有給休暇（持ち越し日数を含む）の取得日数を尋ねたところ、3年以下では466名中101名、4～10年では492名中63名、10年以上では590名中49名が無回答であった。記入された日数の平均値を調べたところ、表Ⅱ－10の第2列に示すように、3年以下の平均日数が最も少なく、次いで4～10年で、10年以上が最も多かった。

昨年度1年間の有給休暇の使用日数を尋ねたところ、3年以下では466名中98名、4～10年では492名中57名、10年以上では590名中45名が無回答であった。記入された日数の平均値を調べたところ、表Ⅱ－10の第3列に示すように、3年以下の平均日数が4 4～10年と10年以上よりも少なかった。

有給休暇の使用日数÷取得日数×100で使用率を計算したところ、3年以下では466名中141名、4～10年では492名中84名、10年以上では590名中61名が算出できなかった。算出できた使用率の平均値を調べたところ、表Ⅱ－10の第4列に示すように、3年以下の平均使用率が最も高く、次いで4～10年で、10年以上が最も低かった。

表Ⅱ－10 有給休暇の取得日数、使用日数、使用率の平均

	年次有給休暇の 取得日数	使用日数	使用率
3年以下	14.2	5.2	46.5
4～10年	26.8	7.9	36.0
10年以上	33.8	8.4	28.7
平均（重みなし）	26.2	7.3	35.7

4. 専門性

(1) 業務の担当

「以下の保育士の業務について、どの程度実施できていると思いますか？該当するものに○をしてください」として12の業務をあげ、それぞれについて、「できている（1）」、「ほぼできている（2）」、「あまりできていない（3）」、「できていない（4）」、「担当していない（5）」の5段階で評定を求めた。このうち「担当していない（5）」は、他の4つの段階とは別の尺度に位置づけられる。そこで、先ず、この選択肢が選ばれた割合（％）を調べた（表Ⅱ-11）。

表Ⅱ-11 「担当していない」が選ばれた割合（％）

業務	3年以下	4～10年	10年以上
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	7.6	4.1	3.3
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	7.3	3.5	3.3
③子どもの一人ひとりの発達の把握	0.7	0.0	0.5
④保育室の整理整頓	0.0	0.4	0.9
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	0.4	0.6	1.7
⑥保育教材の準備	1.3	1.2	1.9
⑦家庭との連携	0.6	0.0	0.7
⑧他の保育士との連携	0.0	0.0	0.0
⑨園長など上司への適切な報告や相談	0.4	0.4	0.0
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	11.1	9.3	6.9
⑪他の専門機関との連携	31.5	28.2	20.6
⑫地域の子育て家庭への支援	36.3	33.9	25.4

全体的に見ると、⑫地域の子育て家庭への支援と⑪他の専門機関との連携では、他の業務と比べて担当していない者が多かった。

次に、経験年数による違いを見た。その結果、①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案、②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案、⑪他の専門機関との連携、⑫地域の子育て家庭への支援の4つの業務では、違いが顕著であり、いずれも担当していない者の割合は、3年以下で多く、10年以上では少なかった。また、⑤季節に合わせた保育室などの環境整備では、10年以上の担当していない者が多い傾向がみられた。さらに、⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携では、10年以上の担当していない者が少ない傾向がみられた。

(2) 業務の実施の程度

「できている（1）」から「できていない（4）」までの回答に対して、それぞれ1点から4点を与えて、平均値を算出した。その値を示したものが表Ⅱ-12である。先ず平均値を見てみよう。値が小さいほど、「できている」に近いことになる。⑨園長など上司への適切な報告や相談、⑧他の保育士との連携、③子どもの一人ひとりの発達の把握の平均がいずれも1.8で並んでいるが、実際の値を見ると、この順に平均値が低かった。

次に平均値が高い業務を見ると、⑫地域の子育て家庭への支援、⑪他の専門機関との連携が2.6で並んでいるが、実際の値では、この順に平均値が高かった。2.6は、評定の段階を見ると、「ほぼできている（2）」、「あまりできていない（3）」の間であり、「できていない」側である。そこで、「できていない」と考えている保育士が多いことになる。

表Ⅱ-12 実施の程度の平均値

業務	3年以下	4～10年	10年以上	平均
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	2.2	2.0	1.9	2.0
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	2.0	1.8	1.8	1.9
③子どもの一人ひとりの発達の把握	2.0	1.8	1.8	1.8
④保育室の整理整頓	2.1	2.1	2.1	2.1
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	2.0	2.1	2.0	2.0
⑥保育教材の準備	2.1	2.0	2.0	2.0
⑦家庭との連携	2.0	1.8	1.8	1.9
⑧他の保育士との連携	1.8	1.7	1.8	1.8
⑨園長など上司への適切な報告や相談	1.9	1.8	1.7	1.8
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	2.1	2.0	2.1	2.1
⑪他の専門機関との連携	2.7	2.5	2.5	2.6
⑫地域の子育て家庭への支援	2.7	2.6	2.5	2.6

次に経験年数による違いに着目した。表に現れている値では0.2程度の差であるが、統計的な分析では次のような差を検出できた。

- ①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案：3年以下 > 4～10年 > 10年以上
- ②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案：3年以下 > 4～10年 ≒ 10年以上
- ③子どもの一人ひとりの発達の把握：3年以下 > 4～10年 ≒ 10年以上
- ⑥保育教材の準備：3年以下 > 4～10年 ≒ 10年以上
- ⑦家庭との連携：3年以下 > 4～10年 ≒ 10年以上

⑧他の保育士との連携：3年以下＞4～10年

⑨園長など上司への適切な報告や相談：3年以下＞4～10年≒10年以上

⑩他の専門機関との連携：3年以下＞4～10年≒10年以上

⑪地域の子育て家庭への支援：3年以下＞10年以上

いずれも3年以下が他よりも平均値が高かった。

これらの差について詳しく見るために、各評定段階が選択された割合を調べた。その結果を表II-13に示す。①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案については、「できている」は、10年以上で多く3年以下で少なかった。「ほぼできている」は、4～10年が多く3年以下が少なかった。「あまりできていない」は3年以下が多く10年以上が少なかった。「できていない」は3年以下が多かった。「担当していない」は3年以下が多く10年以上が少なかった。

②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案では、「できている」には顕著な差はなかったが、「ほぼできている」では4～10年が多く3年以下が少なかった。「あまりできていない」は、3年以下が多く4～10年と10年以上が少なかった。「担当していない」は、3年以下が多かった。

③子どもの一人ひとりの発達の把握では、「できている」は、10年以上が多く3年以下が少なかった。また、「あまりできていない」は、3年以下が多く4～10年と10年以上が少なかった。

④保育教材の準備では、「できている」には顕著な差はなかったが、「ほぼできている」では3年以下が少なかった。また「あまりできていない」は、3年以下が多く10年以上が少なかった。

⑤家庭との連携では、「できている」は、3年以下が少なかった。また、「あまりできていない」は、3年以下が多く4～10年と10年以上が少なかった。

⑥他の保育士との連携では、「あまりできていない」は3年以下が多く4～10年が少なかった。

⑦園長など上司への適切な報告や相談では、「できている」は、10年以上が多く3年以下が少なかった。また、「あまりできていない」は、3年以下が多く4～10年と10年以上が少なかった。

⑧他の専門機関との連携では、「ほぼできている」は10年以上が多く3年以下が少なかった。「できていない」は3年以下が多く4～10年と10年以上が少なかった。「担当していない」でも3年以下が多く10年以上が少なかった。

⑨地域の子育て家庭への支援では、「できている」は10年以上が多かった。「ほぼできている」は10年以上が多く3年以下が少なかった。また「担当していない」では3年以下が多く10年以上が少なかった。

表Ⅱ-13 専門性に関して各段階が選択された割合 (%)

		できて いる	ほ ぼ で き て い る	あ ま り で き て い な い	い で き て い な い	な い 担 当 し て い る
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	3年以下	8.70%	60.00%	23.26%	0.43%	7.61%
	4～10年	13.17%	70.16%	12.55%	0.00%	4.12%
	10年以上	19.00%	68.05%	9.67%	0.00%	3.28%
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	3年以下	17.49%	60.91%	14.25%	0.00%	7.34%
	4～10年	20.45%	70.76%	5.32%	0.00%	3.48%
	10年以上	22.85%	68.90%	4.98%	0.00%	3.26%
③子どもの一人ひとりの発達の把握	3年以下	15.90%	67.97%	15.47%	0.00%	0.65%
	4～10年	25.00%	70.90%	4.10%	0.00%	0.00%
	10年以上	26.98%	68.04%	4.47%	0.00%	0.52%
④保育室の整理整頓	3年以下	18.36%	56.59%	24.19%	0.86%	0.00%
	4～10年	13.76%	59.34%	26.28%	0.21%	0.41%
	10年以上	16.75%	60.51%	21.54%	0.34%	0.85%
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	3年以下	22.17%	55.00%	21.30%	1.09%	0.43%
	4～10年	20.49%	53.48%	24.59%	0.82%	0.61%
	10年以上	19.59%	58.59%	19.24%	0.86%	1.72%
⑥保育教材の準備	3年以下	14.32%	58.35%	25.60%	0.43%	1.30%
	4～10年	16.46%	64.81%	17.28%	0.21%	1.23%
	10年以上	18.02%	64.99%	14.90%	0.17%	1.91%
⑦家庭との連携	3年以下	16.23%	67.53%	15.58%	0.00%	0.65%
	4～10年	21.93%	72.95%	5.12%	0.00%	0.00%
	10年以上	22.81%	72.04%	4.29%	0.17%	0.69%
⑧他の保育士との連携	3年以下	28.63%	58.79%	11.71%	0.87%	0.00%
	4～10年	32.72%	61.35%	5.73%	0.20%	0.00%
	10年以上	30.14%	61.64%	7.36%	0.86%	0.00%
⑨園長など上司への適切な報告や相談	3年以下	26.19%	59.52%	13.64%	0.22%	0.43%
	4～10年	31.08%	61.76%	6.34%	0.41%	0.41%
	10年以上	34.93%	57.88%	6.85%	0.34%	0.00%
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	3年以下	19.96%	41.21%	23.86%	3.90%	11.06%
	4～10年	21.19%	49.79%	16.87%	2.88%	9.26%
	10年以上	19.79%	51.22%	18.58%	3.47%	6.94%
⑪他の専門機関との連携	3年以下	4.60%	22.32%	31.51%	10.07%	31.51%
	4～10年	4.41%	29.83%	33.82%	3.78%	28.15%
	10年以上	6.27%	31.88%	37.63%	3.66%	20.56%
⑫地域の子育て家庭への支援	3年以下	3.74%	19.56%	31.87%	8.57%	36.26%
	4～10年	3.74%	22.45%	33.47%	6.44%	33.89%
	10年以上	6.06%	28.89%	33.74%	5.88%	25.43%

5. 満足度・意識

(1) 満足度

表Ⅱ-14の第1列に示す8つの項目について、「満足している(1)」「まあまあ満足している(2)」「あまり満足していない(3)」「満足していない(4)」の4段階で評定を求めた。平均値を示したものが表Ⅱ-14である。全ての項目に対して、無回答が見られたので、平均値を算出した人数(N)についても表中に示した。

表Ⅱ-14 満足度の評定値の平均

	3年以下	4～10年	10年以上	平均(重みなし)
①現在の勤務体制 N	1.8 463	2.0 488	2.0 586	2.0 1537
②現在の仕事内容 N	1.7 461	1.9 488	1.9 584	1.8 1533
③現在の仕事に対する報酬(給与) N	2.2 463	2.4 487	2.2 585	2.3 1535
④保護者との人間関係 N	1.9 462	1.9 488	1.9 585	1.9 1535
⑤同僚との人間関係 N	1.6 457	1.7 489	1.8 584	1.7 1530
⑥上司との人間関係 N	1.7 461	1.8 463	1.8 582	1.8 1530
⑦保育士としての自分の成長 N	2.7 463	2.5 488	2.4 585	2.5 1536
⑧自分がかかわった子どもに対する保育 N	2.4 462	2.2 489	2.1 582	2.2 1533

まず平均値を見てみよう。値が小さいほど、「満足している」に近いことになる。⑤同僚との人間関係は1.7で最も値が小さかった。次いで、⑥上司との人間関係と②現在の仕事内容の平均はいずれも1.8で並んでいるが、実際の値を見ると、この順に平均値が低かった。次に平均値が大きい項目を見ると、⑦保育士としての自分の成長が2.5で最も大きく、③現在の仕事に対する報酬(給与)が続いていた。

次に経験年数による違いに着目した。表に現れている値では0.2程度の差であるが、統計的な分析では次のような差を検出できた。

- ①現在の勤務体制：10年以上≒4～10年>3年以下
- ②現在の仕事内容：10年以上≒4～10年>3年以下
- ③現在の仕事に対する報酬(給与)：3年以下≒10年以上>4～10年
- ④保護者との人間関係：10年以上>3年以下≒4～10年
- ⑤同僚との人間関係：10年以上>4～10年≒3年以下
- ⑦保育士としての自分の成長：3年以下>4～10年≒10年以上
- ⑧自分がかかわった子どもに対する保育：3年以下>4～10年≒10年以上

これらの差について詳しく見るために、各評定段階が選択された割合を調べた。その結果を表Ⅱ-15に示す。①現在の勤務態勢については、「満足している」は3年以下が多く10年以上が少なかった。「まあまあ満足している」は3年以下が少なく10年以上が多かった。「あまり満足していない」と「満足していない」では3年以下が少なかった。

②現在の仕事内容では、「満足している」は3年以下が多く10年以上が少なかった。また「あ

まり満足していない」では3年以下が少なかった。

③現在の仕事に対する報酬（給与）では、「満足している」は3年以下が多かった。「まあまあ満足している」は10年以上が多く4～10年が少なかった。「満足していない」は4～10年が多く10年以上が少なかった。

④保護者との人間関係では、「満足している」は3年以下が多く10年以上が少なかった。「まあまあ満足している」は10年以上が多く3年以下が少なかった。

表Ⅱ-15 満足度に関して各段階が選択された割合（％）

		満足している	まあまあ満足している	あまり満足していない	満足していない
①現在の勤務体制	3年以下	34.99%	50.76%	12.74%	1.51%
	4～10年	25.61%	53.28%	17.83%	3.28%
	10年以上	20.82%	58.87%	16.38%	3.92%
②現在の仕事内容	3年以下	37.09%	52.93%	9.11%	0.87%
	4～10年	29.92%	56.15%	12.70%	1.23%
	10年以上	27.23%	57.02%	13.70%	2.05%
③現在の仕事に対する報酬（給与）	3年以下	22.46%	40.39%	27.00%	10.15%
	4～10年	16.02%	38.60%	29.77%	15.61%
	10年以上	17.78%	43.38%	25.13%	8.72%
④保護者との人間関係	3年以下	24.46%	63.15%	9.96%	0.43%
	4～10年	23.57%	67.62%	7.79%	1.02%
	10年以上	16.07%	74.36%	8.89%	0.68%
⑤同僚との人間関係	3年以下	49.67%	43.98%	5.03%	1.31%
	4～10年	39.88%	55.01%	3.48%	1.64%
	10年以上	31.51%	58.39%	9.42%	0.68%
⑥上司との人間関係	3年以下	40.35%	46.85%	10.41%	2.39%
	4～10年	35.32%	50.10%	11.50%	3.08%
	10年以上	33.68%	52.41%	11.17%	2.75%
⑦保育士としての自分の成長	3年以下	3.67%	33.91%	53.78%	8.64%
	4～10年	4.71%	44.67%	44.67%	5.94%
	10年以上	3.76%	52.14%	41.37%	2.74%
⑧自分がかかわった子どもに対する保育	3年以下	5.84%	52.60%	38.31%	3.25%
	4～10年	7.77%	66.05%	24.54%	1.64%
	10年以上	6.53%	73.71%	19.07%	0.69%

⑤同僚との人間関係では、「満足している」は3年以下が多く10年以上が少なかった。「まあまあ満足している」は10年以上が多く3年以下が少なかった。「あまり満足していない」は10年以上が多く4～10年が少なかった。

⑦保育士としての自分の成長では、「まあまあ満足している」は10年以上が多く3年以下が少なかった。「あまり満足していない」と「満足していない」は3年以下が多く10年以上が少なかった。

⑧自分がかかわった子どもに対する保育では、「まあまあ満足している」は10年以上が多く3年以下が少なかった。「あまり満足していない」と「満足していない」は3年以下が多く10年以上が少なかった。

(2) 意識

表II-16の第1列に示す6つの項目について、「とても感じる(1)」「やや感じる(2)」「あまり感じない(3)」「まったく感じない(4)」の4段階で評定を求めた。平均値を示したものが表II-16である。全ての項目に対して、無回答が見られたので、平均値を算出した人数(N)についても表中に示した。

先ず平均値を見てみよう。値が小さいほど、「とても感じる」に近いことになる。②子どもと過ごす時間の楽しさは1.3で最も値が小さかった。次いで、①現在の仕事に対するやりがいの値が小さかった。次に平均値が大きい項目を見ると、④仕事における自分の持ち味の発揮が2.2で最も大きく、③保護者からの信頼、⑤仕事における肉体的なきつき、⑥仕事における精神的なきつきが続いていた。

次に経験年数による違いに着目した。表に現れている値では0.2程度の差であるが、統計的な分析では次のような差を検出できた。

表II-16 意識の評定値の平均

	3年以下	4～10年	10年以上	平均(重みなし)
①現在の仕事に対するやりがい N	1.5 460	1.5 488	1.5 584	1.5 1532
②子どもと過ごす時間の楽しさ N	1.2 460	1.3 488	1.3 586	1.3 1534
③保護者からの信頼 N	2.2 457	2.1 486	2.0 584	2.1 1527
④仕事における自分の持ち味の発揮 N	2.5 458	2.2 482	2.1 579	2.2 1519
⑤仕事における肉体的なきつき N	2.2 462	2.1 489	1.8 585	2.0 1536
⑥仕事における精神的なきつき N	2.1 462	2.0 489	1.8 585	1.9 1536

②子どもと過ごす時間の楽しさ：10年以上>3年以下

③保護者からの信頼：3年以下>4～10年≒10年以上

④仕事における自分の持ち味の発揮：3年以下>4～10年>10年以上

⑤仕事における肉体的なきつき：3年以下>4～10年>10年以上

⑥仕事における精神的なきつき：3年以下≒4～10年>10年以上

これらの差について詳しく見るために、各評定段階が選択された割合を調べた。その結果を表Ⅱ-17に示す。②子どもと過ごす時間の楽しさでは、「とても感じる」は3年以下で多く10年以上で少なかった。「やや感じる」は反対に10年以上で多く3年以下で少なかった。

③保護者からの信頼では、「とても感じる」は10年以上で多かった。「やや感じる」は10年以上と4～10年で多く3年以下では少なかった。「あまり感じない」は3年以下で多く10年以上と4～10年では少なかった。

④仕事における自分の持ち味の発揮では、「とても感じる」は10年以上で多く3年以下で少なかった。「やや感じる」は10年以上と4～10年で多く3年以下では少なかった。「あまり感じない」は3年以下で多く10年以上と4～10年では少なかった。

⑤仕事における肉体的なきつきでは、「とても感じる」は10年以上で多く3年以下で少なかった。「あまり感じない」は3年以下と4～10年で多く10年以上では少なかった。「まったく感じない」は3年以下で多く10年以上で少なかった。

⑥仕事における精神的なきつきでは、「とても感じる」は10年以上で多く3年以下で少なかった。「あまり感じない」は3年以下と4～10年で多く10年以上では少なかった。

表Ⅱ-17 意識に関して各段階が選択された割合 (%)

		とても感じる	やや感じる	あまり感じない	まったく感じない
①現在の仕事に対するやりがい	3年以下	52.39%	42.83%	4.78%	0.00%
	4～10年	52.66%	43.24%	3.89%	0.20%
	10年以上	51.88%	42.64%	5.14%	0.34%
②子どもと過ごす時間の楽しさ	3年以下	77.17%	21.96%	0.87%	0.00%
	4～10年	72.95%	26.64%	0.41%	0.00%
	10年以上	69.28%	29.18%	1.37%	0.17%
③保護者からの信頼	3年以下	5.25%	65.86%	28.23%	0.66%
	4～10年	5.56%	83.13%	10.91%	0.41%
	10年以上	8.22%	83.05%	8.56%	0.17%
④仕事における自分の持ち味の発揮	3年以下	3.71%	45.85%	48.69%	1.75%
	4～10年	7.88%	64.73%	26.14%	1.24%
	10年以上	11.57%	68.22%	19.52%	0.69%
⑤仕事における肉体的なきつき	3年以下	13.20%	53.25%	29.65%	3.90%
	4～10年	19.84%	49.69%	28.83%	1.64%
	10年以上	32.48%	52.14%	14.70%	0.68%
⑥仕事における精神的なきつき	3年以下	19.70%	54.55%	23.38%	2.38%
	4～10年	27.81%	48.26%	22.09%	1.84%
	10年以上	34.19%	51.79%	12.82%	1.20%

6. 今後の勤務

「あなたは、今後も保育士として勤務することを考えておられますか。「はい」または「いいえ」のどちらかに○をつけた後、その理由について該当するものすべてに○をつけて下さい（複数回答可）」として、理由欄に12の選択肢を設けた。「はい」か「いいえ」かの選択の割合を示したものが表Ⅱ-18である。なお、3年以下では32名、4～10年では50名、10年以上では59名が無回答であった。

表Ⅱ-18 継続勤務の希望（％）

	はい	いいえ	回答人数
3年以下	91.5	8.5	434
4～10年	86.2	13.8	442
10年以上	92.1	7.9	531
平均（重みなし）	89.9	10.1	1407

平均値を見ると9割程度が「はい」であり、多くの保育士が継続して勤務することを考えているといえる。

経験年数による違いを見ると、「はい」は10年以上で多く4～10年で少なかった。

次に理由を分析した。「はい」の理由は、「満足だから」という観点で選んでもらった。表Ⅱ-19は、各理由が選ばれた割合を示したものである。数値の算出の分母となったのは、3年以下が397名（表Ⅱ-18で、 434×0.915 。以下同じ）、4～10年が381名、10年以上が489名である。

表Ⅱ-19 継続勤務を希望する理由として選ばれた割合（％）

	3年以下	4～10年	10年以上	平均（重みなし）
①給与	28.0	24.7	40.3	31.0
②休暇	41.1	38.3	40.7	40.0
③労働時間	42.6	32.5	35.8	37.0
④仕事の内容	66.5	64.6	68.3	66.5
⑤雇用形態	32.0	29.9	36.8	32.9
⑥職場の人間関係	57.2	55.1	56.6	56.3
⑦福利厚生	33.0	29.9	35.8	32.9
⑧職場の将来性	28.7	23.6	28.4	26.9
⑨通勤の便利さ	57.7	52.0	52.6	54.1
⑩研修の充実	24.7	24.4	24.7	24.6
⑪保育の理念・方針	41.3	36.5	42.7	40.2
⑫人材育成の雰囲気	33.5	23.6	26.4	27.8

先ず平均値を見てみよう。最も値が高かったのは④仕事の内容であり、次いで⑥職場の人間関係、⑨通勤の便利さと続いていた。これら3つは50%を超えており、過半数の保育者がこれらに満足だから、今後も勤務を続けたいと考えていた。

次に経験年数による違いを調べたところ、①給与、③労働時間、⑫人材育成の雰囲気での差が顕著であった。①給与に関しては、10年以上が多く4～10年が少なかった。③労働時間については、3年以下が多く4～10年が少なかった。⑫人材育成の雰囲気でも3年以下が多く4～10年が少なかった。

最後に「いいえ」を選んだ者について、その理由を分析した。「いいえ」の理由は、「不満だから」という観点で選んでもらった。表Ⅱ-20は、各理由が選ばれた割合を示したものである。数値の算出の分母となったのは、3年以下が37名（表Ⅱ-18で、 434×0.085 。以下同じ）、4～10年が61名、10年以上が42名であった。

表Ⅱ-20 継続勤務を希望しない理由として選ばれた割合（％）

	3年以下	4～10年	10年以上	平均(重みなし)
①給与	54.1	59.0	35.7	49.6
②休暇	37.8	41.0	42.9	40.6
③労働時間	35.1	44.3	40.5	40.0
④仕事の内容	45.9	39.3	54.8	46.7
⑤雇用形態	18.9	29.5	16.7	21.7
⑥職場の人間関係	45.9	41.0	33.3	40.1
⑦福利厚生	2.7	9.8	9.5	7.4
⑧職場の将来性	29.7	36.1	35.7	33.8
⑨通勤の便利さ	16.2	9.8	7.1	11.1
⑩研修の充実	8.1	3.3	7.1	6.2
⑪保育の理念・方針	13.5	4.9	9.5	9.3
⑫人材育成の雰囲気	35.1	42.6	35.7	37.8

先ず平均値を見てみよう。最も値が高かったのは①給与であり、半数近い者がこれを選んだ。数値が40%を超えた理由は、④仕事の内容、②休暇、⑥職場の人間関係、③労働時間であった。

次に経験年数による違いを調べたところ、①給与でのみ、10年以上で少ない傾向が見られた。

Ⅲ. 追加的分析

以下に述べることは、「D. 研究委員の考察 小野田研究委員による考察」と「E. 総合的考察」をまとめるにあたり、追加的に分析を行ったものである。

1. 「持ち帰り」仕事

表Ⅱ－8で示したように、いわゆる「持ち帰り」をしたという回答は、3年以下で48.7%、4～10年で49.5%、10年以上では56.1%であった。これらの割合の実人数は、同じ順に220名、234名、311名であった。これらの回答者について、仕事の内容とその所要時間を調べた。

まず仕事の内容と所要時間のいずれかが書かれていない回答票を調べた。その結果、3年以下では46票、4～10年では54票、10年以上では75票でいずれかが書かれておらず、これらは分析から除くことにした。記述内容を見ると、3年以下で1票は「職場の人間関係、ピアノがうまく弾けない、子どもをうまくまとめられない」と、仕事ではなく、悩みの内容が書かれており、時間も2時間30分と30分の2つの値が書かれているだけで、分析が困難であった。また10年以上で1票は、「その他の内容にかけた時間」として7時間30分を計上しており、分析が困難であった。そこでこれらの票も分析から除くことにした。分析に用いた票数は、3年以下が173票、4～10年が180票、10年以上が235票であった。

次に、書かれていた仕事の内容を分析・分類した。その結果、主な内容は、以下の5つに分けることができた。

a. 保育の計画や準備に関する内容（以下、計画準備）

例) 指導計画、指導案、週案、教材作成、保育の準備、ピアノ、体操、制作、壁面

b. 保育の振り返りに関する内容（以下、振り返り）

例) 保育記録、保育日誌、児童票、保育のまとめ、個別記録、経過記録 など

c. 事務的な仕事

例) 事務、書類、会議資料、クラスだより、実習生の記録、報告書、台帳、議事録

d. 行事に関する内容

例) 運動会、遠足、行事、避難訓練、お誕生会、展示会、祖父母競技

e. その他

例) 会議、買い物、借り物、保護者対応、掃除、整理、鍵開け、見回り、縫い物

そこでこれら5つの内容について、平均値、最小値、最大値を算出することにした。なお、その際、例えば、「日案、日誌」として1時間30分を計上している票など、複数の内容を1つの時間に含めて記入されていた場合については、時間を均等に割り振ることとした。すなわち先の例では、「日案」を「計画準備」、「日誌」を「振り返り」として分け、それぞれを45分ずつ

つ行ったと見なした。

表Ⅲ－１は5つの分類された仕事の内容を計上した者の割合を示したものである。全体としてみると、計画準備が40%以上で最も多く、振り返りと事務、行事の3つは、25～30%でほぼ同程度、その他が5%以下で少ないことがわかる。

次に経験年数による違いを見たところ、計画準備では3年以下で計上した者の割合が高かった。事務では計上した者の割合は、3年以下で少なく、10年以上で多かった。

表Ⅲ－１ 「持ち帰り」として各仕事の内容を計上した者の割合（%）

	計画準備	振り返り	事務	行事	その他
3年以下 (N=173)	47.4	26.6	23.7	24.9	2.9
4～10年 (N=180)	42.8	27.8	25.6	30.0	1.7
10年以上 (N=235)	41.3	26.0	37.0	26.8	4.7

表Ⅲ－２は、各持ち帰り仕事に費やした時間の平均値を示したものである。全体としてみると、その他では30分弱と短時間であるが、他の仕事は1時間強と、比較的長くなっている。経験年数による違いを見たところ、振り返りでは4～10年がやや短時間であること、行事では4～10年がやや長時間であることがうかがえる。

表Ⅲ－２ 持ち帰り仕事に費やした時間の平均（分）

	計画準備	振り返り	事務	行事	その他
3年以下	65.0	61.7	64.9	65.8	27.0
4～10年	64.1	43.8	65.6	79.3	26.7
10年以上	58.9	56.8	66.3	63.9	25.9

表Ⅲ－３は、各持ち帰り仕事に費やした時間の最小値と最大値を示したものである。4～10年では行事に関する持ち帰り仕事が8時間という者もいた。

表Ⅲ－３ 持ち帰り仕事に費やした時間の最小値と最大値（分）

	計画準備		振り返り		事務		行事		その他	
	最小値	最大値	最小値	最大値	最小値	最大値	最小値	最大値	最小値	最大値
3年以下	10	300	10	240	5	180	5	150	5	80
4～10年	10	300	10	180	1	300	15	480	5	60
10年以上	10	240	10	240	15	240	10	180	10	60

2. 業務に携わった時間の分析

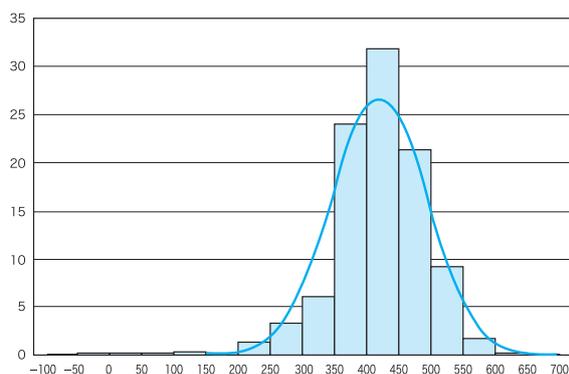
表Ⅱ-7-1には経験年数別に見た業務に携わった時間の平均値、表Ⅱ-7-2にはその最小値と最大値を示した。ここで平均値と最小値及び最大値の関係を見ると、分布の偏りがあることが示唆された。例えば、保育記録を作成するのにかけた時間の平均値は、おおむね20～25分であったが、最小値はいずれの経験年数でも0分、最大値は2時間15分（4～10年）から3時間50分（10年以上）とかなり大きな値であった。このような分布の偏りは、勤務実態を考える上で、誤った推測を導く可能性がある。そこで、表Ⅱ-7-1に示された業務について、ヒストグラムを描いてみた。

図Ⅲ-1は保育の時間、図Ⅲ-2は保育記録を作成するのにかけた時間、図Ⅲ-3は保育教材を作成するのにかけた時間、図Ⅲ-4は事務的な仕事にかけた時間、図Ⅲ-5は保育所内の掃除や整理にかけた時間、図Ⅲ-6は会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間、図Ⅲ-7は休憩時間、図Ⅲ-8はその他の内容にかけた時間のヒストグラムを示したものである。いずれも縦軸は相対度数（%）、横軸は時間（分）である。なお横軸で数値がマイナスになっているところがあるが、これは「0」分の分布である。例えば、記録の時間では、-20～0の間に28%程度の値が示されている。これは0分が28%程度いたことを示している。なお、釣り鐘型のラインは、正規分布を示すものである。

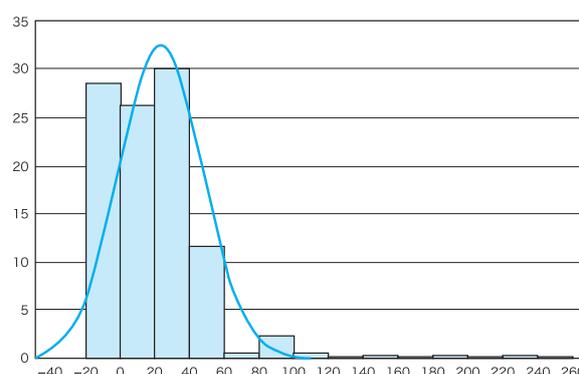
図Ⅲ-1の保育の時間の分布を見てみよう。400分～500分をピークとするほぼ正規分布である。すなわち6時間40分から7時間30の間に、全体の30%以上が入り、平均値である7時間程度と、ほぼ合致する。

次に、図Ⅲ-2の保育記録を作成するのにかけた時間を見てみよう。先の例で述べたように、0分が28%程度、0～20分が26%程度、20～40分が30%程度となっており、平均値が20～25分になっているのも頷ける分布である。ただしここでは分布の形よりも0分の保育士が3割近くいることに注目しておきたい。保育記録を作成する時間がまったくとれていない保育士がこれだけいると言うことである。

図Ⅲ-1 保育の時間の分布

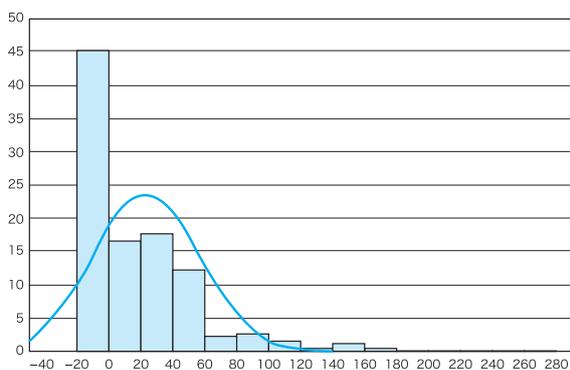


図Ⅲ-2 保育記録を作成するのにかけた時間の分布

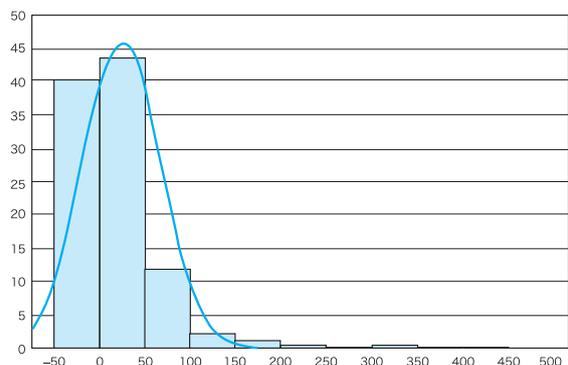


続いて、**図III-3**の保育教材を作成するのにかけた時間の分布を見てみよう。0分が45%で、明らかに左に偏っている。事務的な仕事の時間の分布（**図III-4**）でも、0分は40%とかなり多い。ただしこの図の横軸を見ると50分単位である。これは最大値として7時間の者がいたため、420分の横軸を入れたからである。

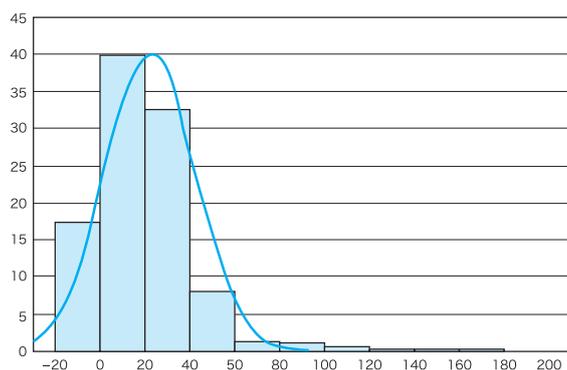
図III-3 保育教材を作成するのにかけた時間の分布



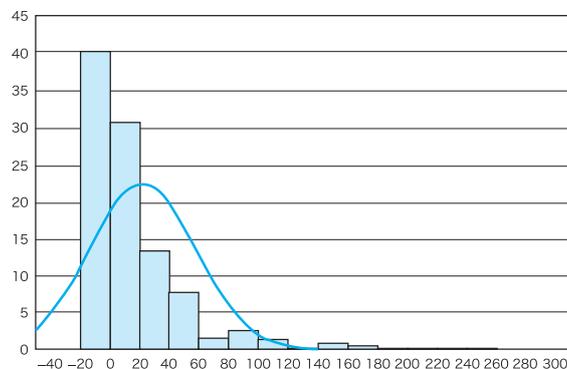
図III-4 事務的な仕事の時間の分布



図III-5 保育所内の掃除や整理にかけた時間の分布



図III-6 会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間の分布



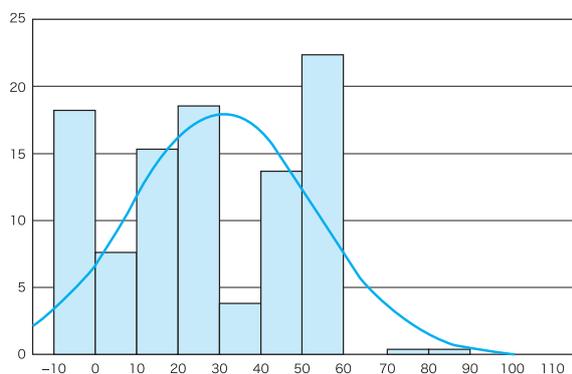
次に保育所内の掃除や整理にかけた時間の分布（**図III-5**）を見ると、正規分布に近かった。会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間の分布では、明らかな左の偏りが見られ、0分が40%

であった。会議や打ち合わせ、報告など保育士同士の連絡や調整はほとんど行われていない、あるいはあまりに短時間で意識されにくいことがうかがえる。情報共有という点では、あまり時間が取れていないと言える。

休憩時間（図Ⅲ－7）とその他の内容にかけた時間（図Ⅲ－8）の分布を見ると、休憩時間は、0分の者もいるが、50～60分の者もあり、散らばりが大きいことがうかがえる。

その他の内容は、0分が多かった。

図Ⅲ－7 休憩時間の分布



図Ⅲ－8 その他の内容にかけた時間の分布

